平和とは何だろう？

――絵本を通して考える――

蓮岡　修

みなさん、よろしくお願いします。「きんだあらんど」から参りました蓮岡と申します。今日は「平和」と、絵本についてお話をするんですけど、私自身が絵本とどう出会ったのか、これは今とも繋がっているので、そういうことも話せたらなと思っています。以前、大谷大学で教鞭を執っていたこともあったので、九〇分が身にはついているんですけど、ただ授業のようなことをやっても面白くないですからね。今日みなさんには気持ちを楽にして、気を抜いて聞いていただけるようなお話をしようと思っています。

僕は絵本屋さんをやって十五年目です。絵本屋さんの他にもう一軒、カフェもやっています。絵本カフェです。大徳寺の近くにあります。実はそこで今日、取材があったんです。なんの取材かというと、「きんだあカフェ」では今、高齢者の人たちを元気付けるよ

うな取り組みをしているんですね。コロナもあってしばらく閉めていたんですけど、五月からまた再開したんです。紫野学区は高齢者の人たちも非常に多いんですけど、そこで、七十五歳以上限定で、絵本の読み語りボランティアをする、子どもさんに絵本を読んであげる、という活動をしています。読む前に、私が「二歳の子にはこういう絵本がいいですよ」とか、いろいろ指導をします。それで読み語りをやってもらって、後で振り返って、みんなでご飯を食べて終わる、という活動です。

二〇四〇年には一〇人に一人が認知症になるという、すごい数字が出ています。あんまり言いたくはないけれども、みなさんはこれから膨大な数の高齢者を支えていかないといけないんです。これは確実に来る問題です。それに対して今、何ができるのかを考えたんですけれども、やっぱり、高齢者の方たちってまだ元気なんですよ。今、七十代って言ったら、あなた方よりもっと派手で、激しい時代を生きていたわけなんですね。超ミニスカートが当たり前だった時代です。そういう人が今、七十代になっているのでポテンシャルがありすぎるんです。ちょっとつついたらものすごく得るものがある。その人たちに、まだ働いてもらいたいと僕は思っているんです。

私はお坊さんなので、だいたい週に二回は葬儀をやっています。かなり頻度高くお坊さ

んをやっています。みなさんはたぶん知っていると思う「無財の七施（むざいのしちせ）」という、お布施のなかに床座施（しょうざせ）というものがあります。これは何かと言うと、椅子を譲る布施です。ただ、椅子を譲るという意味合いではなしに、その人に場所を与えてあげるという布施なんです。例えば、パーティとかで一人ポツンといる人に話し掛けたりする、これが床座施です。「あなたここにいていいんですよ」ということ。高齢者の人たちに必要なのは、あなたはここにいていいんですよ、あなたはあなたでいていいんですよ、っていう空間なんです。その床座施を、私は今、カフェでやっている最中です。

認知症予防に良いことが二つあります。これは科学的にも実証されています。麻雀と読み語りです。麻雀が一番いいんですよ、本当にボケないです。これは相手を想像するからです。別の脳を使うんですね。だから、おばあちゃんがいたら麻雀をさせたらいい。「おばあちゃん、麻雀したらいいよ」って言って。健康麻雀とかこれから絶対に流行るんです。今でも流行っているんだけど。あと、読み語りです。子どもの目線を想像して何かをやる、この力がものすごく脳に良いらしいです。

私が何で高齢者のことをやろうかと思ったかというと、高齢者の命も、子どもの命も、同じです。この光は両方とも尊い。どっちが上でどっちが下というわけではない。両方と

も輝かないといけないんですよ。何かね、高齢者の人たちはもうだいぶ生きたんだから……ってなりつつあるんだけど、私は違うと思います。だから今、子どものこともやっています。小さい保育所みたいなものも二つ運営しているんですね。カフェの上、お店の上でやっています。社会的に少し弱い人たちが「自分たちには何ができるのか」を考えていかないといけない時代になったということです。

何の話をしていこうかなと、話しながら思っているんですけど、平和についてちょっと話します。みなさん、平和大好きでしょ。大好き、かもしれない。こういう本があります。リンドグレーンという人を知っているかな？『長靴下のピッピ』とか書いた有名な児童文学作家です。そのリンドグレーンの『暴力は絶対だめ！』という本があります。非常に名著なんですよ。リンドグレーンはドイツの書店協会の賞を受けました。ドイツと言ったら敗戦国で、平和についてものすごくセンシティブに取り組んでいるんですけど、書店協会はもっと、過激なくらいに平和について論議をする人たちです。その「ドイツ書店協会平和賞」という、累々たる人たちが受けている賞にリンドグレーンは選ばれたんですけど、彼女は一度辞退してるんです。いろんな理由があって辞退するんですけど、その後受けて、スピーチをするんですね。その代わり、この原稿は一字たりとも推敲しないという

のが条件でした。これがなかなか的を射ているので、平和についての話の前に紹介したいなと思います。

親愛なるみなさま！

まずわたくしがなすべきことは、みなさまに心から感謝することです。このドイツ書店協会平和賞は、燦然と輝きを放っており、実際に手にすると、その栄誉に身のすくむ思いがいたします。今わたくしが立っておりますこの場所で、幾年もの長きにわたって、すぐれた人たちが、人類の未来について、そして、わたくしたちすべてが切望する永遠の平和について、希望のある提案をされてきました。

すでに語られた以上に、わたくしはいったいどんなお話をすることができるでしょう？

平和について話すということは、存在しない何かについて話すということです。真の平和というものは、この地上には存在しませんし、わたくしたちが明らかに達成できない目標という意味以上には、たぶん存在してこなかったでしょう。人類は、地球に生まれてこのかた、暴力と戦いに明け暮れてきました。そして、つかのま存在す

る、壊れやすい平和は、絶えず脅威にさらされていたのです。

（アストリッド・リンドグレーン『暴力は絶対だめ！』岩波書店、二〇一五年、一〇～一一頁）

これは一九七〇年代の文章です。この人が平和の授賞式で語ったのが「平和なんて存在しない」という一言だったんです。私は以前、アフガニスタンで中村哲というお医者さんのもとで、四年ぐらい一緒に働いていました。最初は病院で働いていてその後に井戸を掘っていたんですけど、その後しばらく違う団体で、難民キャンプの設営とか、病院の建築とかをやって、その後またアフガンに戻りました。水道建築に携わって僕は四年ほどで辞めました。中村哲のことをみなさんはあまり知らないかもしれないけど、同じことを言っているんですよ。私が仕事をしていたのは一九九九年あたりです。あの頃は世界的な大干ばつが起きてアフガニスタンが特に酷かったんです。いろんな理由はあるんですけど、とにかく雨が一滴も降らない時期が何年か続いたんですね。あの頃に中村哲が属するペシャール会は病院をやっていたんです。僕が何でペシャール会に行ったかというと、もともと戦争の写真を撮っていて、取材がてら先生のところに行って、そこからお付き合いが始まっ

たんです。あの頃のペシャール会はものすごく小さい団体で、僕も病院で働いていました。無医村って言って、お医者さんがいない地区にお医者さんと一緒に派遣されて、私も検査技師の真似事をして血を採ったり、って今では信じられないですけど、白衣着て仕事をしていました。その頃は子どもがいっぱい死んだんですね。私が働いていた病院で赤ちゃんがいっぱい死んだ時がありました。子どもが死ぬということは、みなさんなかなかイメージがつかないかもしれないけど、向こうの人は子どもを十人産むと、だいたい三人は死ぬという計算らしいです。実際に子どもの死亡率は高いです。結局、汚い水が原因だったんでね、井戸を掘ろうかな、となったわけです。それで井戸を掘り始めるわけなんですけど、井戸なんてみんな知らないから、いろんなことをやるわけですよ。最初、中村先生が子どもを助けるために井戸を掘るという時に、何て言ったかというと「手段を選ぶな」と。正直に言って全然平和的ではないんです。手段を選ぶなというのは何をやってもいいということだ、と。我々が課せられたのはそれでした。その代わり、井戸を掘れと。その頃、中村哲のところにたくさんの平和の使者が来るわけです。たとえば、アグネス・チャンからの誘いがありました。その時に先生は、「お断りする」と。なぜ断ったかというと、「わしはきれい事は嫌いなんだ」と言ったんですよ。「きれい事は嫌い」、それとこの本と

どこが結びつくかというと、「平和は概念ではなく実践である」と、われわれに常に言うわけです。今みなさんがよく聞く平和は面白くない。世界平和なんてあり得ないというところに立つ。じゃあ、平和がないかというとそうじゃない。リンドグレーンが、「世界平和はないけれども平和はある」と語り始めるのがこの本だったんです。

みなさん、よく平和のパレードとか見るでしょ。私はあれを否定も肯定もしません。ただ、昔批判をして東本願寺から爪弾きになったことがあります。何というかな、平和って誰も反対しないものでしょ。平和って何かって、僕も大学に行った時に学生さんに、イメージでレポートを書いてもらったことがあるんですけど、まあまあ千差万別です。でもそれは本当にイメージできるものかどうか考えないといけない。私は日本に帰ってきた時に、あんまりにもこの国の平和意識が鼻についてしょうがなかったんです。荒くれた所で、元ゲリラの人たちと仕事をしてきて、それこそ手段を選ばずに水を出すという。僕らはいちゼネコンなので、いちゼネコンの中で仕事をするということは日本と同じです。時に腕力にもの言わせる、人が対峙する世界で生きないといけないわけです。その中でみんな井戸を掘っていた。それで日本に帰ってきて、児童虐待で子どもが殺されているというニュースを見るわけです。みなさんは当たり前かもしれないけど、僕らはその事実を生理

的に受けつけないんです。なぜかというと、われわれは、ものすごくお金も使って、殉死者も何人も出して井戸をいっぱい掘ろうとしていて、それでも子どもが死ぬわけです。ちょっと手が足りない。そのもどかしさがあったから児童虐待で子どもが死ぬなんて、誰が何といおうと日本は平和なんかじゃないって私は言っていたんです。

で、何をするかっていうところですよ。だったら平和のパレードをするか？　そんなことは意味がない。だったら子どもを一人でも救った方がいい、ということで私は絵本を選択したんですね。

絵本って何かというと、親子で心を共有できるものなんです。絵本がない家は実際にあります。保育施設をやりはじめてわかりました。絵本がない家がどうなるのか。これは自明の理です。親子で小さい時に何かを語り合う、愛のある体験をしていない子どもさんたちが非道なことをするわけです。京アニの事件だって、どうも彼は絵本を読んでもらうような生活をしてこなかった。そういう人たちに、どうやって家庭の中で絵本を読んでもらうか。児童虐待って、確実とは言わないけど高い確率で連鎖するんです。児童虐待している人も、昔虐待をされていた。どっかで連鎖を止めないといけない。児童虐待が起こる前に、「おぎゃあ」って産まれた時に、始めないといけないと思ったんですね。そこに良い

絵本があって、読んだらちょっと子どもが笑ってくれて、その時に「この子、可愛いな」って思えたら、ちょっとだけ角度が変わる可能性があると私は思ったんです。そこから十五年、いろんなところで絵本を配ったりしています。

私は今、絵本屋さん養成講座という企画に力を入れています。大学を辞めたのも、悪いけど、あなたたち若い人を教えるよりも、プロの人たちを教えたほうが私の目的に沿っていると思ったからです。実際に絵本を読みたい、絵本屋さんをやりたいっていう人に、どんどん知識を教えて、たくさんの絵本を配ってもらったほうが、一人でも子どもを救えればいいという私の目的に合っている気がします。現在、この絵本屋さん養成講座では百数十人が卒業して、二十くらい新しい絵本屋さんができています。その人たちが届けるのは、本当に質の良い絵本です。みなさんも絵本を使うでしょ。楽しいよね、絵本って。でも僕らが持ってる絵本のイメージは、我が子が愛おしくなるような絵本です。読んでいる大人が満たされた気持ちになる、かつ、子どもも同じようにわかる絵本です。そういう絵本を僕らは名作の絵本と呼んで、手渡そうとしています。こういう試みが実を結ぶのはずっと先だと思いますけど、これが私の思う平和なんです。

中村哲に教えてもらったことがあります。平和は良い方向に向かって歩く道筋のことを

言います。それは悩んでいかないといけない。いっぱい悩まないといけない。これでいいのかな、悪いのかな、と考えながら進む道のことを平和というんです。煌びやかに、みんな笑顔で、肩を組みあって歌を唄う、それも平和の像かもしれないけれども、私はあまり信用できません。もっと平和って、ドロドロして生々しいものなんだと思っているんです。私のイメージですよ、そうでないかもしれない。ただ、平和っていうのは、今日実践できないと意味がないんですよね。それは何かというと、目の前の人たちに優しい言葉をかけてあげる。床座施を実行する。それでいいわけなんです。

平和の反対が戦争ではありません。僕は一時期、戦争の写真を撮ろうと思って戦地に訪れていましたから、自分も見誤った経験を思い出すのです。戦争の最中にさえ平和はあるんですよ。そういう気持ちになる時がある。平和の反対は暴力です。みなさんが良く知っている暴力です。そしてみなさんが有るときには好んで使う暴力です。自分の体の中にある暴力性、これがいわゆる戦争の原因の部分ですよね。でも、それを知っているからこそ、対抗できるんです。みなさんはおそらく「三帰依文」を言うくらいだから仏教徒でしょ。ということは、みなさんの中には人を殺したい願望もある。人を傷つけたい願望、人をおとしめたい願望、そういうものはみなさんの中にちゃんとあるわけです。備わってい

るんですよね。それは否定するものではない。ただ、それを上回る、人に優しくしたいとか、明るい気持ちを持つというのが仏教だと僕は思っているんです。それの実践の歩みが仏教だと私はいいなと常に思っています。

みなさん、私の声はものすごく魔法があってね……眠いでしょ。そうなんですよ。授業やった時、三百人くらいだったんですよ、人気の授業だったから。でも気持ちよさそうにみんな寝てね。いや、それはそれで良いと思うんですよ。大学の授業なんて、って言ったら変ですけど、これは一つの考え方ですよ。大学の授業で得られるのは種なんです。仏教の知恵のことを「種智（しゅち）」と言います。種智はそのままでは食べることはできません。自分のフィールドを持って、そこに種を蒔いて育てないと実にならない。あなた方はまだそのフィールドを持ってないからね。社会がフィールドです。そこに入ってやらないと実がならないということです。全ての学問がそうです。だから今日は種をちょっと持っていってもらえたらいいなと思っています。

もう一冊、本を読もうかなと思っています。なかなか示唆的なものがありますのでね。文章を読みます。阪田寛夫って知っています？　みんな知ってるよね。「さっちゃん」とかね、詩人です。阪田寛夫調べてみるといい、面白いから。「♪さっちゃんはね……」っ

て歌を作るでしょ。でも、この人ってものすごくドロドロしているわけ。生活自体もそうなんだけど、面白いの、人間味あふれていて。この頃の詩人って、まあまあ激しい。でも、激しいからこそ滲み出るものがね、命に肉迫してきて優しい。ドロドロしてる。その人の「鬼の子守唄」って大好きな詩があるんです。『阪田寛夫詩集』の中にあるので、これを読んでみます。短いんですよ。二回読みます。

「鬼の子守唄」
鬼ヶ島の鬼の子は
やっぱり夜ふけに泣くのです――

こわいよ　かあちゃん
桃太郎がきたよ
はちまきしめて
のぼりもたてて
ガッパ　ガッパ

海からきたよ

ねんねよ　ぼうや
桃太郎もねんねだよ
西の空まっくろけ
東の空まっくろけ
ガッパ　ガッパ
こんやはさむい

もう一度。

こわいよ　かあちゃん
桃太郎がきたよ
はちまきしめて
のぼりもたてて

ガッパ　ガッパ
海からきたよ

ねんねよ　ぼうや
桃太郎もねんねだよ
西の空まっくろけ
東の空まっくろけ
ガッパ　ガッパ
こんやはさむい

（阪田寛夫『阪田寛夫詩集』角川春樹事務所、二〇〇四年、一七二頁）

なかなか良い詩でしょ。示唆的です。鬼ヶ島の鬼の子もやっぱり泣くんですよ。戦争は何かっていうと、想像力の欠如です。もう一言いうと、平和も想像力の欠如だと思うんです。

これは、聞いている人は聞いてくれてたらいいなと思うし、聞いてない人も多いからそ

れはそれでやりやすいんだけど（笑い）、私は昔、ある団体から中村哲の絡みもあったので講演を依頼されたんですけど、その講演が原発反対、基地問題反対だったの。わりかし身近に聞く話でしょ。それを僕は断った。原発反対と基地問題に係わる講演です。みなさんだったらどう思うかな。原発、もちろん反対。基地、もちろん反対、だと思うんだよ。私も両方、そういう意味ではあっていいものではないと思っている。でもね「反対」っていうのが問題です。原発で生活をしている家庭があるわけよ。そこに子どももいるわけです。小学校に行っている子どもとかね。その子に「原発反対」って言えないと反対じゃない。基地で暮らしている人たちっていっぱいいるわけよね。その人たちに「基地なんかあっていいものではない」って面と向かって言えるのが平和の実行性です。「それができないでやるんじゃない」って私は言ったことがあります。アプローチとしてやるんだったら、原発のない生活がいいよねって、やり始めて、そしたら原発をやっている人たちも、そっちの方がいいよねって、それで変わってくるのが平和的な進め方なのね。基地問題もそう。やっぱり基地はない方がいいよねってなればいいけど、そうでないかぎり、情熱の捌け口にしかなってない。いつか基地問題が片付くかもしれないって、そういう考え方が私はすごく嫌いなんです。何でかというと私たちは平和の活動をしていたから。中村哲が

思っていた平和は、子どもを一人救うってことだったので、私たちはそれに対してものすごくビジョンを明確にして、一生懸命できていたんだよね。今日は平和って言葉を使うけれども、それはフワフワしたものではない。私の平和のイメージは、目の前の人に挨拶することだったり、仏教的な視野でいうと、無財の七施そのままです。ま、口幅ったいけれども、相手に優しい言葉をかけるとか、微笑みかけるとか、そういうことです。そういうことをしてないのに何かをするのは、衝動でやっていると思われてもおかしくないですよね。

まず一つ、私は絵本が平和の道具だと信じています。ただ、一番小さな平和なんですよ。家庭の中で一番小さな平和をつくる。それが集まって平和になる、そう思って活動をしています。

もう一つ、僕は今、絵本屋さんをやっています。絵本屋さん養成講座もやって、さっき言ったように全国に二十箇所くらい絵本屋さんができています。でも、絵本屋さんで食えるはずがない。これは当然の話です。理財が悪すぎる。千円売って二百円しか儲からない世界だからね。生活なんてなかなかできない。やっている人もいるけれども。ではどうやって生活するかというと、みんな講演とかね、イベントとかして生活をするわけです。

これからみなさんも仕事をするでしょ。仕事って何かというと、いろんな言い方があると思うけど、私は自分を表現するための一つの活動だと思っています。自分の良い部分をちゃんと表現して、それで誰かが喜んで対価を払ったら、それが仕事です。対価を払わなくても仕事です。仕事って楽しいものなんですよ、本当はね。ただ、どちらかに意識が偏ると「やってらんない」って気持ちになる。私はみなさんに、絵本屋さんで生計を立てようなんてゆめゆめ思ってはいけない、とまず伝えます。絵本屋さんは何かというと、一言で、自分が素敵になる、自分を高めることができる仕事だと思っています。

私は大谷大学を卒業しましたけど、三十数年前の入学式で、事務局長のスピーチがすごくよかったんです。あとでその人のことを調べたらもう亡くなっていたけど、開口一番、「みなさん、お洒落してください」って言ったのね。それってすごく言い得て妙なんです。お洒落は着飾ることではないです。もちろん着飾ることもお洒落だけど、自分の価値を高めるってことなんですよ。自分の価値を高めていったら、この人にもう一度会いたいなって思う。それで人が寄ってくる。そこに何かしらのビジネスが発生するわけです。それをやらずに人にものを売ろうなんて詐欺です。自分の価値を高めれば高めるほど、遠くからものを買いにきてくれる。これがビジネスです。たぶん、仕事というのはこういうことで

す。何で言ったかというと、これから起業する人もいるかもしれないでしょ。

それから、ガラッと視点を変えて、仏教って何かというと、一言ではなかなか言いにくいけれども、私は「相手を褒める」ことだと思う。さっき鐘が鳴ったからこれ正解なんだよ。いや、マジでこういうことあるの。相手を褒めること。褒めるって何かというと、「あなたの中に阿弥陀さんがおられるんですよ」と言ってあげることが仏教です。「あなたの中に尊いものがあるんですよ、良かったですね」って言ってあげるのが、僕は仏教だと思っています。自分の中に阿弥陀さんがいると思うから仏教は成立するんです。これはすごく感情的な喜びです。「うわー、すごい。ありがてー」。これがさっきのよく分からない「三帰依文」の正体です。もっと現代語的にやった方が僕はわかりやすいと思うんだけど、とにかく、自分の中にも阿弥陀さんがいるんだ、嬉しいなと。その阿弥陀さんって何なんだと、みんな救ってくれるんだ、そういうような気持ちでお経とか読むとすごくわかりやすいから、いっぺんやってみるといいですよ。

で、絵本屋さんも、絵本自体が子どもを褒めることなんです。「あんた、素晴らしい世界に生まれてきたね」っていうのを物語を通して伝えてあげるのが絵本です。産まれたばっかりの赤ちゃんはこれからいろんな社会のこと、世界のことを知っていかなきゃいけな

い。その子どもさんたちに、われわれ大人が何を言えるのか。「あんた素晴らしいところに生まれてきたね、ラッキーだったね」ということです。それが自己肯定感になって、いろんなものが美しく見えてくるんです。そのうち、三歳くらいで自己が確立していくと、「そうでもない」って何となくわかるんだけど、ベーシックなところで「自分はラッキーなんだ」という思考がありさえすれば、多少のことは乗り越えていける力がつくわけです。

そして、今度はお母さんを褒める。「こんな良い子を産んだんだね」って褒めてあげる。「絵本を読んであげようと思ってるんですね」って褒めてあげる。「良い絵本選んだね」って褒めてあげる。とにかく褒めちぎることです。そうすると、自分は間違ってなかった、子ども可愛いなって思って、言葉も全然変わってくるわけです。そうすると親子の関係性も若干変わってくる。敬意を払えるようになる。これが絵本の一つの力です。だから、絵本屋さんも、仏教も、同じだといえば同じなんです。そういう人たちのところに本を買いに行きたいでしょ。自分が元気になる人にみんな会いたいと思うもんね。だから人が集まってくる。お寺もそうです。お寺って何かというと、何百年と変わらない真実があり続ける場所なんです。同じ真理がずーっと愚直にもあり続けて、それを継承して、体現してい

る人がそこに住まう場所、これがお寺です。その真実は何かというと、「あなたっていいよね、素晴らしいよね」っていうことです。褒めるっていうことです。と、私は理解しています。あまりにも俗的な言葉なので、既存のお坊さんはどう思うか知らないけれども、少なくとも私みたいな破戒僧はそう思ってます。

僕は週に二回も葬儀をやってるって、これはすごい多いんです。いろんな依頼を私は断りません。自殺者とかすごく多いんです。あと、中には殺された人もいます。それをみんな同じようにケアしていかないといけない。たじろいじゃダメなんです。とにかく、一生懸命生きましたよねと言って肯定してあげないと、どんな命でも。

そうやっていくと、冒頭に言った、高齢者の人たちが元気に輝く姿がすごく愛おしく見えるわけです。これは、これからビジネスをやる人に発言していると思ってくださいね。そこらへんがキーワードです。これから確実に求められるものは何かというと、自分を肯定してくれる空間です。ただこれに関しては、おべっかを言ってたら一瞬でばれちゃうのね。子どもがそう。子どもに絵本を、つまらないなぁって思って読んだら一瞬でばれちゃう。だからこそ、面白いなって思う本を選ぶ。つまらない本が多すぎるんですね、正直。今は、毎月一六〇冊ずつ絵本の新刊が出てるんだけど、書店に並ぶのはそのうち一二〇

冊、後は幼稚園で処理されます。一二〇冊も新刊が出ているんですよ。それを僕らは表紙とデータを見るわけです。まあまあ、使い捨て時代の象徴のような絵本が増えています。その中から本当に良い絵本を選ぼうと思ったら、一冊あるかないか。なぜかというと出版社は刷った本を売り切ったら儲かります。二万部のベストセラーを刷って在庫を抱えるより、そっちの方が儲かる。だから、消費的な本を売り切る。それでちょっとでも引っかかったらキャラクター化してシリーズ化する。今残ってる本はみんなそれでしょ。パン〇〇とか、おしり〇〇とか、シリーズ化できるものにしか力を入れないようになっている。それが一番儲かるから。「五〇万部販売」ってあれ嘘だからね。五〇万部刷ったってだけの話で、売れたわけではない。五〇万部刷って、三〇万部返品されているはずです。何部売れたかって計りようがないから。そういうところにみなさんも惑わされていると思うんだよね。今、お母さんたちに聞いてもそう。レビュー見て買うでしょ。みなさんもそうかもしれない。もの買う時って、レビューみて。お金大切だからね。できるだけ損しないようにって選ぶんだけど、絵本に関しては六割以上ステマです。はっきり言います、ステマです。みんなステマに踊らされてる。だから、本物をちゃんと目で見て選ばなきゃいけないんです。

ちょっと、はなから全然違う話をしてたら後少しになってしまった。いかん、絵本読みます。まず、二冊読みます。

これ、知ってる人？みんな知ってる？　知っている人手を挙げてくれたらすごく嬉しい。あ、いる。『ちびゴリラのちびちび』という本です。これ、大人でもクリスマスプレゼントとかに使えるからね、買うといいよ。これは二歳ぐらいの子どもさんが大好きな絵本です。絵本を十冊選べと言われたら私は必ず入れている本です。

今、絵本屋さんの一階で可愛いギャラリーをやっているんですけど、その奥でバーをやろうかなと思って。私は学生時代にバーでバイトしていたんです。バーに対して神聖なイメージがあってね。絵本とバーってものすごく相性がいいんです。大人がね、みなさんも大人でしょ、少し鎧を脱いで絵本を楽しむためにはね、お酒でも飲んだほうがいいんですよ。と思ってね、バーを作りました。週に二回ほどしか開けてないけど、ぜひ、機会があったら来てほしいな。

はい、じゃあ『ちびゴリラのちびちび』という絵本を読みます。

『ちびゴリラのちびちび』

ちいさなかわいいゴリラがいました。
みんなちびちびがだいすきでした。
おかあさんもおとうさんも
おばあさんもおじいさんも
ちいさいゴリラがだいすきでした。
ちびちびがうまれたそのひから
みんなはこのちびゴリラがだいすきでした。
ひらひらとんでるピンクのちょうも
みどりのおうむもあかいさるも
ちいさいゴリラがだいすきでした。
あのでっかいへびだって
「ちびちびはかわいいな」とおもっていました。
さんぽがすきなのっぽのキリンは
いつもそばにいてちびちびをたすけました。
こどものぞうもおとなのぞうも

ちびちびにあいにやってきました。
ライオンのおじさんはちびちびをよろこばせようと
おおきなひめいをあげてやりました。
かばのおばあさんはちびちびがいきたがれば
どこへでもいっしょにいってやりました。
なぜってちびちびがだいすきでしたから……
そうなんです。もりのどうぶつたちは
みんなこのちびゴリラがだいすきでした。
そんなあるひなにかがおこりました――
ちびちびがおおきくなりはじめたのです。
どんどん
どんどん
どんどんおおきくなって
とうとう……
こんなにおおきくなりました！

もりのみんながやってきました。
そしてみんなでうたいました。
「おたんじょうびおめでとうちびちびくん！」
みんなはいまでもちびちびがだいすきです。
（ルース・ボーンスタイン『ちびゴリラのちびちび』ほるぷ出版、一九七八年）

はい。『ちびゴリラのちびちび』でした。

これは二歳の子が大好きです。「大好き」って言われることの大切さってあるんです。「あなたのことが大好きだよ」って態度だけじゃダメなんですね。やっぱり言葉にしないとダメ。「あなたのこと大好きだよ」って言えるお母さんもいれば、恥ずかしくて言えないお母さんもいっぱいいるわけです。そういう人にこの絵本を読んでもらったら、「大好き」っていう言葉が代弁されるわけです。子どもはお母さんが自分に言ってくれてるのと同じになっちゃうわけですね。それは嬉しいんですよ。普段怒られてばっかりいる子が「大好きでした」って言葉を聞くだけでね。そうやって、かけがえのない体験が積み重なっていくんです。

あと、もう二冊。四歳ぐらい……、ここで僕たちは四歳の発達課題を考えて「四歳」と言っています。四歳の頃って不安感と劣等感が感情の中心にあるわけです。それを補うようにして、勇気とか、優しさが出てくるんだけれども、今まで百パーセント肯定されてきた世の中から、そうでない世の中にブチ当たってくる頃です。その時にどんな絵本を読んであげたら彼らがちょっと救われるのか。それを考えながら聞いてください。四歳ぐらいの子が大好きな絵本です。いっぱいあるんだけど今日はこれを持ってきました。

『さいごのこいぬ』

おかあさんの、9ひきのこどものなかで、
ぼくは、さいごにうまれた。
おかあさんのおっぱいをのめたのも、さいご。
めがあいたのも、さいご。
ミルクのおさらから、ミルクをのめるようになったのも、さいご。
それに、よるになって、いぬごやへはいるのも、さいご。
ぼくは、さいごのこいぬ。

あるひ、おかあさんのかいぬしが、かんばんをだした。
『こいぬうります』
つぎのひ、ちいさなおんなのこがやってきて、
ぼくたちのなかの、いっぴきをつれていった。
そのよる、ぼくは、ねむれなかったよ。
だって、しんぱいだったんだ。
「ぼくのばんがくるのかなあ？
やっぱり、さいごのこいぬになるのかなあ？」
あさになると、ちいさなおとこのこが、こいぬをえらびにきた。
「ぼくを、ねえぼくを！」
ぼくは、けんめいにほえたよ。
「このこいぬ、なんてうるさいんだ」
そういうと　おとこのこは、ぼくではなくて、
ほかのこいぬをえらんで、いってしまった。
そのつぎのひだった。

やさしそうなおんなのひとが、
いまにも、ぼくをえらんでくれそうだったんだ。
それで、ぼくは、そのひとのひざにジャンプしてみせたよ。
そしたら、そのひと、ミルクのおさらにしりもち。
おひゃくしょうのかぞくが、こいぬをえらびにきたときのこと。
おとうさんが、ぼくをみつけてだきあげてくれた。
ぼくは、ここぞとばかり、おとうさんのはなをかんであげたよ。
おひゃくしょうのかぞくは、２ひきをえらんでいってしまった。
あとに、４ひきをのこしてね。
まもなく、のこりは、３びきになった。
それから、２ひきに。
そして、やっぱりぼく。さいごのこいぬ。
でも、あるひ、ぼくにもばんがまわってきた。
おおきな手が、ぼくをだきあげて、
ちいさなおとこのこの手に、わたしてくれた。

それから、じどうしゃにのったんだ。
ちいさなおとこのこは、ぼくを、ひざにだいてくれ、
かおを、ぼくのかおのちかくまで、くっつけた。
それで、ぼくは、はなをペロリとなめてあげた。
おとこのこは、わらいながら、いったよ。
「ねえ、しってる？　きみは、ぼくのさいしょのこいぬだってこと」

（フランク・アシュ『さいごのこいぬ』童話館出版、二〇〇五年）

はい、『さいごのこいぬ』でした。

なんとなく、自分自身のことってわからないんですよ。でも誰かに肯定してもらうことで自分の人生は変わるんです。みなさんもそうでしょ。自分ってどう思われてるんだろうとかね、考えるわけですよ。でもね、ちょっと視点を変えてみると、自分が全然違う人物だったりするわけです。

では、最後です。短めの。一歳。スターターのブックとしてお渡しすることが多いです。これ、みなさん、あなどることなかれ。ものすごく知識が詰め込まれています。月の

大きさのバランスがすごく良いと思わない？　これは黄金比で作られています。だから、ずっと見飽きない。1：1：1・6の比率です。よい絵本って、だいたいこういう事細かな部分を押さえて作ってるんです。一歳がどういう時期か。これから世界をいっぱい見ていく時期です。ここに保育をやっている人がいると思うんだけど、一歳の発達課題で、やっと記憶表象が始まった頃です。ごっご遊びが始まる頃ですよね。だから次の展開に前後の繋がりがないとわかりにくいわけです。だから同一場面で展開するのが一歳の子の絵本の基本の構造になります。じゃあ、まず読んでみますね。

あまり時間もないので、背景知識として、林明子さんは、まず和歌の素養があります。そしてものすごく言葉を丁寧に使う人です。

『おつきさまこんばんは』

よるに　なったよ
ほら　おそらが　くらい　くらい
おや　やねのうえが　あかるくなった
おつきさまだ

おつきさま　こんばんは
だめ　だめ　くもさん　こないで　こないで
おつきさまが　ないちゃう
くもさん　どいて
おつきさまの　おかおが　みえない
ごめん　ごめん
ちょっと　おつきさまと　おはなし　してたんだ
では　さようなら
また　こんど
あー　よかった
おつきさまが　わらってる
まんまる　おつきさま
こんばんは　こんばんは

（林明子『おつきさまこんばんは』福音館書店、一九八六年）

はい、『おつきさまこんばんは』でした。

この『おつきさまこんばんは』は同一画面で展開していましたよね。これがミソです。これ保育の人は何度も何度も読まされます。「もういちどよんで」「もういちどよんで」っていうタイプの本です。とにかく流れるような言葉なんですよ。何度読んでもサラリとしている。そして、ここに書かれているのがいわゆる「こども語」です。一歳の子どもが今、われわれがしゃべる言葉を聞いてすべて理解できるはずがないでしょ。単語も知らないし、文節もまだよくわからないわけだから。外国語にすらなってない、音なんです。点と点を結び付けているだけ。その中で彼らがどういうふうにコミュニケーションの道具として言葉を使うかというと、言葉のニュアンスです。お母さんが怒った語彙を含んだ言葉が恐怖になったりします。だから、彼らが一番親しんでいるのは「あなたが大好きだよ」「よく来たね」、そういう優しい言葉なわけです。この絵本には、だいたい彼らが日常生活で聞くニュアンスが詰め込まれています。だから、懐かしいなと思って耳を傾けてくれます。

そして、これは「お月様にこんばんはって言いましょう」って本でもあります。一歳ぐらいの人たちはこれを読んだ後に、お月様を見上げて「こんばんは」とか言うわけです。

実際に言うの。みんな言わないでしょ。言う人もいるかもしれないけど、言わない。なぜかというと、「お月様こんばんはって友達じゃないだろ」って思っている。でも、彼らはお月様が友達なんですよ。大きい自然物にさえ、信頼と愛情を感じる世界に彼らは生きているんです。だから、われわれがとうに失ってしまった、ま、本当は持っているんですけどね、忘れてしまった芳醇な世の中に対しての信頼を、まさに育てる時期なんです。お月様と友達だから、もちろん犬や猫とも友達です。これがいわゆる自己肯定感を育てていく核になるわけです。周りに友達がいっぱいいる自分が嬉しくてしょうがない。そんなバカなこと言うなよ、なんてゆめゆめ言ってはいけない。「そうなんだよ、あなたはお月様とも友達なんですよ」と、どんどん言ってあげないといけない。そういう世の中を紹介するのが大人の役割です。育てることも役割だけど、もっと重要なのは、世の中を紹介するということです。それを絵本を使ってぜひやっていただきたい。ただ、おもしろおかしい絵本ではなくて、「あなたは素晴らしい世界に生まれてきた」ということを伝えられる絵本が、彼らの自己肯定感を育てていくんです。それを大人も一緒に意味をわかって、読んだ後に子どもの姿を見て、「何てこの子かわいいんだろう」と思う。そこで信頼が、別の敬意に変わってくるわけですね。

最後に中村哲のことを言います。僕はあの人とわりかし身近に過ごした時期があります。カバン持ちをやっていましたから。あの人は、最後に死ぬまで、殺されるまで、一言で言って威張ったことがなかったんですね。これはすごいことです。われわれに対しても威張らなかった。なぜ威張らなかったかというと、敬意を払ってたからです。相手に対する尊敬とかそういうものでもないんです。ただ、僕らの人生や、アフガニスタンで暮らしている貧しい農民の物語に対して非常に敬意を払っていた。二十数キロの水路もアフガンの自然にすごい敬意を払っているから、ほとんど歪めてないんです。自然を壊さないように作っている。優しいという話ではありません。ものすごく恐い人だし、僕なんか褒められたことはあまりないし、ただの恐いじいさんだと思っていたけれども、命に対する敬意はずっと持ち続けていたと思うんです。われわれとはちょっと違う視点を持っていました。存在というより物語に対する敬意です。例えば、五十歳の人と向き合ったら、五十歳分の物語がそこにあるわけです。いろんなものを食べて、いろんな感動をして、いろんな喧嘩もして、嬉しいこともあった、そういう物語に対する敬意をずっと持ち続けていたのが常人ではなかった。それを僕らはすごくよく感じていました。だからこそ、非常に荒っぽかったけど、アフガンの人たちを愛おしんでいました。

もう一度、平和とは何かといったら「敬意」です。他人に対する興味と敬意ですよね。そして、絵本も興味と敬意。そしてまた仏教にいたっては、さらに一歩進んだ「あなたの中に阿弥陀さまがいる」。他人に対して、あなたの中にも私と同じ阿弥陀さまがいるんだな、と。この敬意です。それが、

御同朋御同行（おんどうぼう　おんどうぎょう）

というものです。それを今日は「平和」という言葉で共有しようかなと思いました。支離滅裂だったかもしれないけれども、ま、種だから。一フレーズでも覚えていてくれたら嬉しいです。